

プロジェクトマネージャー：岡 瑞起（千葉工業大学 変革センター 主席研究員）

1. プロジェクト全体の概要

2025 年度は、社会インフラ、医療・福祉、クリエイティブ産業という、異なる領域において技術的挑戦と社会実装を志向する 3 つのプロジェクトを採択した。

『浸水予測用の都市インフラデータベースの機械学習による自動作成』（竹内プロジェクト）は、内水氾濫浸水予測に不可欠な都市インフラデータベースの作成工程を、GIS と機械学習を組み合わせる自動化する取り組みである。『「みんなで楽しくできる」XR リハビリテーション空間の構築』（平塚プロジェクト）は、XR 技術を用いて複数人が同時に参加できるリハビリテーション空間を構築し、リハビリの孤独さと退屈さを根本から変えることを目指した。『クリエイターの制作フローをトレースできる画像生成モデルの開発』（守田・永井プロジェクト）は、画像生成 AI において前景・背景をレイヤー単位で分離生成・編集できる技術を開発し、クリエイターの制作フローを AI 上で再現することを目指した（この「クリエイター」とは、アニメ産業をはじめとするクリエイティブ現場で働く人々を指し、本事業の採択者である「クリエータ」と意図的に異なる表記をしている）。

いずれのプロジェクトも、純粋な技術研究にとどまらず、実際のユーザや現場との接点を持つことを意識した提案であり、未踏事業の趣旨に合致するものであった。

2. プロジェクト採択時の評価（全体）

PM としての採択基準は、以下の 3 点を重視した。

第一に、技術的な深さと独自性である。既存技術の単純な応用ではなく、提案者自身の専門知識や着想に基づいて、技術的に新しいアプローチを打ち出しているかを重視した。

第二に、社会実装への意識である。技術を作って終わりではなく、それを誰に届けるのか、現場でどう使われるのかまで見通しているかを評価した。未踏事業は研究助成ではなく人材育成事業であり、技術と社会の接点を自ら作り出す経験こそが、クリエータの成長にとって最も重要だと考えている。

第三に、提案者自身の動機と熱量である。なぜこのテーマに取り組むのか、その根底にある個人的な動機や問題意識が明確であるかを見た。強い動機を持つ提案者は、困難に直面しても粘り強く取り組む傾向があり、未踏期間を通じた成長の伸びしろも大きい。

竹内プロジェクトは、土木工学という未踏では珍しい分野からの提案であり、「土木と

ITをつなぐ」という明確な問題意識と、浸水予測という社会的に切実なテーマへの深い理解が採択の決め手となった。平塚プロジェクトは、父親の脳卒中というきわめて個人的な体験に根差した強い動機と、新雪プログラムでの先行開発による技術的な蓄積、そしてXRマルチプレイという技術的に野心的なアプローチが際立っていた。守田・永井プロジェクトは、画像生成AIの分野で既にトップレベルの研究成果を上げていた実力と、その研究をクリエイターの制作フローに落とし込むという実用的なビジョンを評価した。

3. プロジェクト終了時の評価

3つのプロジェクトはいずれも、技術的な成果という点では当初の期待に応えた。

最も顕著な成長を遂げたのは平塚プロジェクトである。技術開発と現場実証の両輪を高い水準で回し、介護施設でのワークショップでは初日の失敗を翌日に改善するという、まさに未踏事業が育てたい力を体現した。

竹内プロジェクトは、GISと機械学習を組み合わせた独自のアプローチで道路幅データの自動抽出を実現し、行政機関や研究者との関係構築も自発的に進めた。技術と社会をつなぐ「橋渡し」人材としての基盤が着実に形成された。

守田・永井プロジェクトは、研究面では国際トップ学会への採択を含む優れた成果を上げた。一方で、その研究成果をエンドユーザに届けるプロセスへの本格的な取り組みが終盤に偏ったことは課題として残る。

全体として、PMとしての指導方針は「クリエイタ自身の判断と行動を尊重しつつ、社会実装への意識を繰り返し促す」ことに置いた。月次の指導を通じて各プロジェクトの方向性を確認し、特に現場との接点を持つタイミングでは重点的にアドバイスを行った。